

～ 贈る言葉 ～

# 若者たちへ

前長崎大学長 齋藤 寛 Saito Hiroshi

この秋、長崎大学長を任期満了により退任された齋藤先生。  
6年間に渡った学長職の中で、国立大学の法人化という  
大きな局面を迎え、長崎大学の新しい指針を示し、  
数々の重要な足跡を残されました。  
重責から解き放たれた今、齋藤先生から  
これからの時代を担う若者たちへ  
“贈る言葉”をお届けします。



月日の経つのは早いものです。2002年10月創刊の「CHOHO」第1号の巻頭特別インタビュー「齋藤新学長が語る長崎大学の近未来」で読者の皆様にはじめてお話ししてから6年が過ぎ、任期満了により私は長崎大学長を退任しました。

6年前、この誌面で私が何を約束したか振り返ってみましょう。今はやりのアウトカムの検証です。私の約束は以下の4項目でした。

## 1 指導者が熱意を持ち、懸命に教育をする大学をめざす

文部科学省は2003年(平成15)から、特色ある教育プログラム「特色GP」など、教育の質の高さが保障され、かつ他大学への波及が期待される教育プログラム<sup>①</sup>の公募を始めました。長崎大学はこれまでに17課題が採択されています。この採択数は全国国公私立大学705校のトップ10に位置します。また、全国で131課題採択の「グローバルCOE(世界的研究拠点)」に本学から「放射線健康リスク管理」・「熱帯病・感染症制御」の2課題が採択されました。本学教員の教育・研究に対する熱意と質の高さを示す何よりの証拠です。



長崎水辺の森公園にて

## 2 学問を愛する、平和を大切に

私は機会あるごとに、1945年8月9日の原爆により約1,000人もの先輩が犠牲になつたのです。キャンパスは原爆で生命を落とした先輩たちが眠っている奥津城<sup>おくつき</sup>です。たばこのポイ捨て、紙くずやペットボトルの投げ捨てなどは、先輩を冒とくする実に恥ずべき行為です。ごみが落ちていたら、そうと拾って片付けてください。このことはキャンパスの外でも同じです。たとえば皆さんが1人で暮らし始めた長崎の町内で「ごみ出しのルールを無視することは、何百年もの昔から高杉晋作、坂本龍馬、福沢諭吉ら「長崎游学の若者」を温かく迎えてくださった長崎の人々を、現代の長崎游学者はこんな心無い振る舞いをするのか」と悲しませませ。原爆の犠牲になつた先輩たちの分まで、よく生き、よく勉強するのが学生、教職員、OB、すなわち長崎大学人の責務です」と訴えてきました。構内のたばこの吸殻・空き缶などのポイ捨てが本当に少なくなりました。私は「長崎大学人」が志の高い人間であることを誇りにしています。



### 3 市民との交流を深める 新しいビジョン

ハード面での長崎大学の最大の課題は校舎や研究室の老朽化でした。何しろ築30年以上の建物が全体の70%にも及ぶのです。鍵のかけられない学生用トイレもありました。これまでの6年間に総合教育研究棟、熱帯医学研究所、附属図書館・放送大学長崎学習センター合築、経済学部、工学部、教育学部、水産学部、医学部・歯学部附属病院新病棟、学生プラザ、サクル部室、またグラウンドやテニスコートなどの新築・改修・整備143、400㎡、総額487億円が完了しました。国の財政事情が非常に厳しいとき



医学部・歯学部附属病院新病棟

に、これだけの整備ができるのは正直言うて思っていませんでした。これはすべて学生の教育にかける長崎大学の熱意と実績が文部科学省に高く評価された結果です。

「新しい図書室と充実された蔵書のおかげで良いレポートが書けた」、「音楽の練習が周囲に気兼ねなくできる」、「トイレが明るく、きれいになってうれしい」と学生諸君に喜んでもらっています。

また、市民の皆様の図書館、会議室、運動場などの利用が飛躍的に増えたこともうれしい限りです。「長崎大学が持つすべてのソフト、ハードは市民の皆様との共通財産」が長崎大学のポリシーです。

#### 市内路面電車

車の車体広告や、市内各所に掲示されている私のキャラクターが登場する「長崎大学応援団募集」のポスターが話題になっています。このキャラクターは長大生の作品で、片峰茂学長当時、教育担当副学長（長）が採用しました。長崎大学を高校生、そして市民によく知ってもらいたい、という気持ちの表れです。



### 4 留学生が街を元気にし、やさしくする

2002年まで長崎大学外国人留学生数は220人前後で横ばいでした。その後、毎年増加して、今年は過去最高の360人となりました。彼らは長崎大学外国人留学生協会を組織し、毎年夏に市民との交流の場である「インターナショナル・カルチャー・デー」を開催するなど、市民との交流、地域活性化にも貢献しています。



ところで長崎大学広報誌「CHOHO」は、学長としての私と同じ2002年10月に生まれました。もともと大切な読者対象者を高校生に設定しましたが、格別の思い入れがあります。毎回九州・山口の高校・予備校に送付しました。「読みたい生徒が多いので、もっと送付部数を増やしてほしい」と要請があったときはうれしかったです。発刊部数は当初3,000部、最近10,000部です。編集陣は工学部教授の原田哲夫部

会長以下この6年間不変です。法人化するまで大学というところは何をするにも、持ち回り、「順送り」でした。大学法人化の大きな成果の一つです。

私は若い人に接するたびに、地球の将来は明るいと思ってきました。これまでも世界は常に一生懸命な若者の力で発展してきたのです。若い皆さん、これからも「何事も一生懸命」で願います。

そのような若者が入学する長崎大学がさらに発展しないわけがありません。大学側は、若い力だけに依存するのでなく、若い人の力を引き出す教育・研究を推進する責任があります。理念に「学生顧客主義」、世界の知の情報発信拠点」を掲げる長崎大学の将来は輝かしいと私は確信します。

私は25年前に医学部教授として着任して以来、常に学生諸君と一緒にでした。幸せでした。学長退任後もひきつづき、「長崎・若者が全国から、世界から集まる素晴らしい街」に住める幸せを噛みしめながら生きて行きたいと思っています。それでは皆さん、さようなら。再見。

